お鶴淵〈つるぶち〉（三田市・岩倉・幡尻境）

今から、百有余年前のことです。この地方にお鶴という美しい親孝行な娘がありました。
おとうさんは、体が丈夫〈じょうぶ〉でありませんでした。
お鶴さんは、小さい時から親思いの子でした。おとうさんが病気でねている時は、その世話をよくし、おかあさんのあとをついていって、山では山仕事、野では田んぼ仕事をせっせと手伝いました。
村の人々は、「お鶴さんは、本当に美しい子だ。顔も心も美しい孝行娘だ。」
と、いって自分の子や、村の若者の手本にするくらいでした。
おとうさんは、とってもしじみがすきだったのです。お鶴さんは、ひまな時や、仕事の間〈あいだ〉に川や、溝〈みぞ〉へいってはしじみを取り、それをおとうさんにたべさせていました。
おとうさんは、そのしじみを目を細くして、よろこんでたべました。
お鶴さんは、さもおいしそうにたべるおとうさんの顔をみて一人でよろこんでいました。
「ああ、わたしは幸〈しあわ〉せ者だ、おとうさんも、おかあさんもいる。あんなによろこぶおとうさん、もっともっとよろこばせてあげたいわ。」
と、思い続けていました。

ところが、ある日のことです。
「今日も、うんとしじみを取ってよろこばせてあげよう。」
と、かごをかかえて、いそいそと川へ出かけました。
「お鶴ちゃん、今日もしじみとり。」
急に後から声がするのです。振り返ってみると、いつの間についてきたのか、村の友達が二～三人いました。
「うん、一しょに行こうよ。」
お鶴さんは、気持ちよく川へいきました。いつもたくさんいる所へ行ったのです。だが、どうしたのでしょう。今日にかぎって少ししか取れません。お友達は、小さいのを見つけては、
「キャッ。キャッ。」
と、さわいで遊んでいます。けれど、お鶴さんは気が気でありません。水底の石の一つ一つが、よろこんでいるおとうさんの顔に見えてくるのです。思えば思うほど取れません。ただ気があせってくるだけでした。
お鶴さんは川上へ川上へと、しじみを求めて上って行きました。もうずい分川上まで来ました。
お鶴さんには始めての所です。そこは大きな淵〈ふち〉のある所です。その淵の上の砂地がある所にかごを置き、流れる瀬の所へやって来ました。そこには、今までにみた事もない程、いっぱいしじみがいるのです。
お鶴さんは、おどりあがらんばかりによろこんで取り、取ってはかごに入れ、取ってはかごに入れました。
もう、かごはいっぱいになりそうです。こんなにたくさんとって帰ると、おとうさんは、どんなによろこぶだろうと思うと、もう胸はよろこびでいっぱいになりました。
その時、いっぱいになったかごは、しじみの重みと砂地のやわらかいために、
「ゴロリ」
と、水の流れの中へひっくりかえってしまったのです。
お鶴さんは、
「これは大変。」
と、かごをとりに必死〈ひっし〉の思いでかけ出そうとしました。けれど水の中です。思うように足は動きません。
「ツルリ」
「アッー。」
お鶴さんは、あまりいそいでいたので石で足をすべらせ、深い淵へすいこまれるように沈んでいきました。
お友達は、村人に助けを求めましたが、村人が来て引き上げた時はもう冷たくなっていました。
それから後、誰いうとなくこの淵を、「お鶴淵」というようになりました。

（橋上　清氏談）